

最優秀賞

私にできる第一歩

綾部市立上林中学校 二年

引原 菜花

私の住んでいる上林の地域は、綾部市の中で最も面積が大きく、自然の豊かなところだ。上林のほとんどが山で、面積が大きい割には住んでいるところは上林川の周辺のほんの一部です。また、上林の山から出る水がどんどん集まり、上林川になって由良川へと合流します。私はその透明で生き物がたくさんいる上林川が大好きです。

上林は、奥上林、中上林、口上林の三つに分けられています。私は今、奥上林に住んでいます。しかし、小学三年生の後半までは中上林に住んでいました。そこでは水道が通っていて、毎日安全で美味しい水を使っていました。ところが、今私の住んでいる地域では水道がここまで通っていません。だから、現在井戸水を使っていますが、住み始めた頃は山の水を使っていた。

初めて山の水を使う時、母は「蛇口の水でもそのまま飲むのはやめときな。」と私に言いました。中上林に住んでいた頃、今まで普通に水を飲んできたので私は「なんで？」と聞き返しました。すると母は「飲むときは水を沸騰させてからでないと安全とは言えないから。」と言いました。私は不便だなと思いつつも、そうして水を使ってきました。それから、今まで使ってきた安全な水は、当たり前ではないのだと実感することができました。また、大変なことも起こりました。それは水が出なくなりました。私は「水道が凍っていないのになんで？」と焦りました。母が隣の家のおじいちゃんに聞きに行くと、葉っぱや泥でパイプが詰まっていたそうです。パイプの掃除が終わるまでは水が出ません。だから、近所の人たちが私たちの家に、飲料水が入ったペットボトルと、山の水が入ったペットボトル

をくださいました。初めて蛇口から水が出なくて、どうしようかと不安だったのですが、近所の人たちの温かさが、ものすごく嬉しかったです。水が蛇口から出るようになるのと、私たちは安心してまた暮らせるようになりました。そして、水のありがたみや、水がないとこんなにも不安で不便なんだと知ることができた経験でした。

この経験をおかげで、毎日安全な水を使えることに感謝して水を使おうと意識できるようになりました。

また、安全な水を使える人は世界にどのくらいいるのだろうか、ふと考え調べてみました。すると、世界の人口約八十億人中、五十八億人が安全な水を使っており、二十二億人が安全な水を使うことができないと分かりました。約四人に一人が安全な水を使うことができず、そのうち一億一五〇〇万人が未処理の地表水を使っているそうです。今の日本の人口が約一億二〇〇〇万人なので、日本の人口以上の人が未処理の水を使っているということになります。

このように、こんなにたくさんの人々が安全な水を使うことができず、毎日不安な思いで過ごしていると考えると怖いのです。私たちには、今すぐ安全な水が使えないところに行って直接助けることはできません。しかし、自分たちには何ができるのかを考え、行動することはできます。私は、毎日安全な水が使えることに感謝すること、そして、その水を大切に使うこと。最後に、水のことだけではなく、不安な思いをしている人をできる範囲で助けることをしていきたいです。これが、私にできる「第一歩」なんだと思います。

優秀賞

メダカが生き活き泳ぐ川

京都先端科学大学附属中学校 二年

楠本 健琉

僕は生き物が好きだ。春にはメダカ、夏にはカブトムシやクワガタを捕まえて飼育している。ふと考えた。カブトムシやクワガタは京都市内でも見つかるのに、メダカがいない。なぜだろう？

僕がメダカを採るのは、京都府北部にある祖父の田んぼの用水路だ。京都市内との違いは何だろう。祖父に尋ねると、「メダカはきれいな水でしか生きられへん。ここには、皆が食べるお米を育てるための澄んだ水と豊かな自然があるからメダカもたくさん育つんやで。」と教えてくれた。僕はハッとした。メダカが暮らせるかどうかは、水の清らかさにかかっているんだ。「じゃあ、鴨川の水がもつときれいになればメダカも住めるん。」と尋ねると、祖父は「そやで。」と力強く答えた。

ネットで調べると、メダカは京都府のレッドリストに載り、絶滅危惧種に指定されているという衝撃的な事実を知った。本来、どこにでもいる普通の魚だったが、今では府内の生息地も限られ、京都市内ではほぼ絶滅状態があると書かれていた。ショックだった。さらに調べると、かつて絶滅したと考えられていた深泥池で、奇跡的に発見され、今は保護活動が進められていることが分かった。一年前学校の探究活動で深泥池に行った時には見つけれなかったが、確かにいるんだ。

なぜメダカはこんなに減ってしまったのか。理由は三つ。一つ目は、生息地の消失。都市開発で田んぼや小川が減り、住める場所が失われた。二つ目は、水質汚染。農薬や生活排水で水が汚れ、メダカが生きるのに適さない環境になった。そして三つ目は、外来種の侵入。ブラックバスやブルーギルがメダカを捕食し、生息を脅かしていた。このままでは、メダカは本当に

いなくなってしまう。

何かできることはないか。僕は祖父の庭にある大きな水鉢でメダカを育てることにした。用水路でメダカを捕り、水鉢に入れた。けれど、しばらくすると水が濁り、メダカの動きが鈍くなった。このままではダメだ。まず、水草で酸素を増やし、ろ過砂利を敷いて水の汚れを減らした。また、別の水鉢にためた雨水を利用してカルキを抜いた自然な水を入れるようにした。メダカは元気に泳ぎ回るようになり、卵を産んだ。共食いしないよう、卵を別の容器に移し、更に幼魚用の環境も整えた。それぞれに雨水が流れ込むような装置も作った。手間はかかったが、百匹を超えるメダカが育った。この経験から、僕は「水を美しく保ち、環境を整えることでメダカの命をつなぐことができる」と実感した。

その後、さらに身近な水環境にも目を向けた。夏休みの自由研究で近所の公園のビオトープを調べてみた。アメンボウやタガメ、水カマキリが生息する場所で二週間。数か所で水を採取し、顕微鏡で観察したところ、流れのある場所にはミジンコやアオミドロなどの微生物が豊富にいたが、流れのない淀んだ場所ではヘドロがたまり、生き物がほとんどいなかった。この違いから、水の循環が生態系にとって重要であることを学んだ。僕はこの体験を通して、日常生活でも水を守るためにできることがあると気づいた。例えば、家や学校で水を無駄にしないこと、雨水を水やりに活用することなど、小さな工夫の積み重ねが水環境の改善につながる。京都でも水環境を整え、メダカや蛍、アユ、オオサンショウウオなどを守る活動が行われている。僕もその活動に参加したい。一人一人ができることは、小さな取り組みでも、人間の体の六十%、魚は七十五%が水でできている。すべての生き物の命を支える水を大切にすることが増えれば、メダカが住める場所も、僕たちが快適に暮らせる環境も広がっていくはずだ。僕の夢は、いつか京都市内の川で再びメダカが元気に泳ぐこと。そのために、水を守る活動を広げたい。

優秀賞

水について考える

京都先端科学大学附属中学校 三年

山本 栗央

私たちの生活に、水はなくてはならないものです。顔を洗うとき、喉が渴いたとき、料理や洗濯、トイレに行くときなど、私たちは一日に何回も水を使っています。しかし、その水がどこから来て、どんな風に運ばれているかを考えることはあまり多くありません。私は、農家をしている祖父の手伝いを通して、水の大切さを実感するようになりました。祖父の田んぼでは、川から水を引いてお米を育てています。夏になると、気温が高く、水がすぐに蒸発してしまうため、祖父は毎日水の様子を見に行きます。水が足りなければ稲が弱ってしまい、秋の収穫に大きく影響してしまいます。水は、作物にとっても命を育てるために欠かせないものなのです。そんな祖父から「琵琶湖疏水」という水路の話聞いたことがあります。これは明治時代に滋賀県の琵琶湖から京都へ水を引くためにつくられた水路です。当時の京都は、都が東京に移ったことで活気が無くなっていました。さらに、水不足や火事が多く、町の生活はとても不便でした。そこで、琵琶湖から水を引くことで京都の町を助けようと考えられたのです。琵琶湖疏水は、大きなトンネルや水門をつくるなど、当時としてはとても難しい工事でした。しかし、沢山の方達の努力によって完成し、京都の人々の生活を大きく変えることが出来ました。疏水は水道や防火用水として使われただけではなく、工場でも利用され、町の産業の発展にもつながりました。中でも凄いと思ったのは、疏水の水を使って「水力発電」が行われたことです。水の流れを使って電気を作り、その電気で電灯や電車が動くようになりました。これは日本で初めての事業用水力発電で、明治時代の京都にとって大きな進歩でした。私は祖父と一緒に実際に琵琶湖疏水を見に行ったこ

とがあります。水は今でも静かに流れていて、まわりには木々がしげりとても気持ちの良い場所でした。祖父は「昔の人の知恵と努力には、頭が下がるなあ」と言っていました。私も、自然の水をどう使うかを真剣に考えていた昔の方たちに、尊敬の気持ちを持ちました。しかし、今の時代でも水は無限にあるわけではありません。世界には、綺麗な水を手に入れることが出来ない人たちも沢山います。私たちが当たり前のように使っている水は、とても貴重なものなのです。だから私は、水をこれまで以上に大切に使用したいと思います。歯磨きのときに水を流しっぱなしにしない、お風呂の水を洗濯に使う、川にごみを捨てないなど、小さなことでも水を守る行動になると思います。祖父は雨が降ると、「今日はええ日やなあ」と笑います。私たちにとってはうつつとうしい雨でも、農家にとっては作物を育てるための大切な恵みなのです。自然の水に支えられていて私たちの暮らしは成り立っていることを、祖父を見ていると強く感じます。琵琶湖疏水を作った人々、自然の水で作物を育てる祖父、そしてその水を毎日当たり前のように使っている私たち。みんな水でつながっています。私はこれからも、水の大切さを忘れずに、感謝しながら生活していきたいと思えます。

特別賞

当たり前の恵み

大山崎町立大山崎中学校 三年

廣田 夏音

水は私たちの生活に欠かせない。

日本では蛇口をひねればいつでもきれいな水が出てくる。これは温かだが、世界的に見るととても恵まれたことだ。世界には、安全な水を求めて何時間も歩かなければならない人々がたくさんいる。その水が本当に安全かどうかも分からないのに、毎日苦勞して水をくんで生活している。もし水が足りなくなれば、私たちの健康や生活はもちろん、食べ物も育てることができなくなってしまう。

日本は水資源が豊かな国だと言われている。だが、油断してはいけない。日本は島国のため降った雨はすぐ海に流れてしまっている。実際に使える量は限られている。その限られた水をたくさんの方がダムを作ったり、水道管を整備したりして大切に使うようにしてくれている。私たちはその努力のおかげで毎日当たり前のように水を使っている。だからこそ、もつと水を大切にしないといけないと改めて思った。例えば、お風呂の残り湯を洗濯に使ったり、節水できるシャワーヘッドにするだけでも家庭で使う水の量を減らすことができると思う。

そして、森林を守ることとても大切だ。森林は、雨水を貯めてゆつくりと川に流す役割がある。森林の伐採によって水が貯められなくなり、洪水や土砂崩れといった災害が起こりやすくなってしまう。さらに、森林が持っている自然のろ過の機能が失われてしまうことで、川や地下水の水質が悪化してしまう可能性もある。だからこそ、普段の生活からゴミを減らしたり、再生紙などを使ったり、森林を守ることに関わる行動を意識していくことが大切。

そして、私たちが当たり前のように使っている「水」の尊さ、

それを支えている多くの人々の努力を次の世代へしっかりと伝えていくことが私たちの重要なことである。最初にも述べたが、蛇口をひねればいつでも安全な飲み水が手に入るといふ日本の恵まれた状況は、世界においては決して当たり前のことではない。そのことを私たちは常に心に留めておくべきだ。

「水」は、私たちの命と生活を支える、最も重要な資源の一つである。そのかけがえのなさを改めて認識し、水を供給するために力を尽くしている全ての人々に感謝の気持ちを持つ。そして、日々の生活の中でできることから節水に努めていくことが、私たちに求められていることだと思う。世界には今この瞬間も水を得るために苦勞している人がいる。その事も忘れずに、感謝の気持ちを持って水を使い、大切さを未来へ繋げていくことが大切である。

そして、私たちは今、真剣に考えて行動するべきことである。世界には「世界水の日」が存在する。日本でも水の大切さを再認識する機会を設け、感謝の気持ちを新たにすべきだと考える。そして、この豊かな水の恵みを、持続可能な形で引き継いでいくことが大切である。そのために、私たち一人ひとりが意識を変えて、具体的な行動に移すことが最も必要なことであると強く感じる。この幸せが当たり前のように続くために、豊かな水を未来に繋いでいくために、より一層身近に感じて、できることから行動していくことが、重要である。

佳作

私のオアシス

京都先端科学大学附属中学校

三年

徳田 葵

私の家は田んぼの前に建っている。道路を一本渡ればすぐ田んぼで、目と鼻の先という言葉が似合う絶好の場所だ。特に私の部屋は窓から田んぼが一望できる。私は、自分の部屋から眺める田んぼの風景が大好きだ。

春。次の収穫に向けて動き始める時期である。田んぼに水がはられ、少しだけ顔を出した小さな稲の子どもが、私に春の訪れを告げる。満たされた水は美しく空を反射し、少し暖かくなってきた気候によく似合う風景になる。

夏。稲の背丈が伸び、風が吹けば波打つようになびく。田んぼは一面緑色で、波打つ姿は森の木々が風に吹かれる景色にどことなく似ている。あまりにも綺麗で、暑苦しい気温や、鬱陶しいカエルの大合唱も、その景色の前では心地のよい空調と背景音楽になる。私は夏が一番好きだ。

秋。稲は黄色く色付き、豊かな穂をつける。夏は緑色だった田んぼが模様替えをしたように黄色になり、風が吹けば黄金色の波を打つ。それからしばらくすると、稲刈りの時期になる。だんだん小さくなっていく波と、寂しそうに佇む切り株のような稲が、私に冬の訪れを感じさせる。

冬。収穫を終え、水が枯れてひび割れた地面と、根っこだけになった稲が、酷く虚しく私の目に映る。厳しい寒さも相まって、憂うつな気分を連れて来る。しかし、それと同時に、次の稲のための準備期間でもある。また春が始まることへのわくわくも連れてきてくれる。

私は悩み事があるときや、なにかモヤモヤしてたまらないときに、心を無にして自分の部屋から田んぼを眺める。次第に心のザワザワが落ち着いてきて、なんとかなる、という気持ちを持ち合わせてきてくれる。私にとって田んぼは心のオアシスなのだ。

そして、私にはオアシスがもう一つある。それは川だ。

小学校の通学路の途中に小さな川が通っている。自然豊かで、様々な野鳥が遊びに来る。特に私のお気に入りには三角州だ。夏は川の水に手を入れて冷たさに浸ったり、冬は水の音を聞きながらぼーっとしたりもする。小学校で嫌なことがあった日、私は決まって三角州によってから帰っていた。

私にとって、水はオアシスだ。田んぼも川も、水がなければ成立しない。幼少期からずっと水泳を習っていたり、祖父母の家が海の近くだったり、何かと水が身近な人生を送ってきた。私は水が大好きだ。

ただ、ものには良い面と悪い面がある。水は、洪水や津波など、大きな自然災害の源になることがある。私が小学校低学年の頃、西日本豪雨が直撃した。私の家に大きな被害はなかったが、居住地域に避難指示が発令された。実際に避難することはなかったが、両親が深刻な顔で避難の準備をしていたことは鮮明に記憶に残っている。九州地方に引越した友人の家は、床上浸水の被害があった。母親の携帯に映し出された写真には、テレビの中のような景色が広がっていた。現実離れた写真には、鳴り止まない緊急メール、両親の深刻な顔。その時まで大きな自然災害を経験してこなかった私にとって、計り知れない恐怖だった。

それでも私は水が好きでいたかった。悪い面があるのは仕方がないことだ。だからこそ、良い面に目を向け続けたかった。災害を止めることは残念ながらできない。しかし、災害で発生する被害を最小限にすることはできるはずだ。自分の命は自分で守り、災害時の持ち出しバッグを準備する。備えあれば憂いなしだ。

私は水が好きだ。これまでも、これからも、好きでい続けたい。そのために、悪い面からも目をそらさず、向き合い続けようと思う。

私のオアシスは、これからもずっと水だ！

佳作

水と向き合うということ

京都先端科学大学附属中学校 三年

京極 湊太郎

「日本の水は、世界でも特にきれいで、安全な水なんだよ。」理科の授業で先生がそう言ったとき、ぼくは改めて水について考えるようになりました。普段、蛇口をひねればあたりまえのように出てくる水。のどが渴いたら冷蔵庫からペットボトルの水を取り出せばいい。そんな便利な生活に慣れきっていた自分が、急に恥ずかしくなったのです。

思い出したのは、この春休みに友達と二人で行ったキャンプのことでした。ぼかぼかと暖かい日が続いていた春休みの後半、ぼくと友達は近くの山のキャンプ場に行きました。テントを張り、自分たちで火をおこしてバーベキューをして、夜には星空を見上げながら語り合うという、最高の時間になるはずでした。ところが、キャンプ初日の夕方、バーベキューの準備しているときに、友達がふと聞きました。「ねえ、水、持ってきたっけ？」その一言で、ぼくたちは顔を見合わせて青ざめました。食材も調理器具も忘れずに用意したのに、肝心の飲み水を持ってくるのを二人とも完全に忘れていたのです。

近くに小さな川が流れていたのを思い出しぼくたちはペットボトルを持って川へ行きました。水は見た目にはきれいでしたが、そのまま飲むのはさすがに不安だったので、鍋に入れて煮沸して飲むことにしました。ぐつぐつと煮立てた水は、少し泥くさく、あまりおいしいとは言えませんでした。それでものどが渴いていたぼくたちには十分ありがたいものでした。

翌日からは、水を集めて煮沸する作業が朝のいちばん最初の仕事になりました。ふだんは蛇口をひねるだけで手に入る水が、こんなにも手間と時間のかかるものだったとは思いませんでした。水の大切さ、ありがたさを、身をもって感じた、三

日間でした。

「水つてさ、こんなに大事だったんだな。」友達が二日目の夜につぶやいたその一言が、今でもぼくの心に残っています。

日本にいと、きれいな水がすぐに手に入るのがあたりまになつてしまします。でも、世界には、ぼくたちが苦勞して手に入れたような水を、毎日長い距離を歩いてくみに行く人たちがたくさんいます。そして、その水が原因で病気になつてしまう人も知り、ぼくはとても驚きました。

この春の体験を通して、ぼくは水のありがたさを強く実感しました。帰ってきてからは、歯みがきのときに水を出しっぱなしにしない、お風呂の残り湯を洗たくに使う、飲み物を残さず飲むなど、できることから気をつけるようになりました。

地球温暖化や気候変動の影響で、世界中で水不足が深刻になっていると学びました。日本でも例外なく、異常気象が続く中で、いつ水が自由に使えなくなるか分かりません。

「自分ひとりが気をつけても意味がない」という人もいるかもしれませんが、でも、ぼくはそうは思いません。あのキャンプでの経験は、ぼくにとつて本当に大切な学びがあり、行動を変えざるきつかけになりました。

水は、命をつなぐものです。だからこそ、あたりまえのように使える今に感謝し、大切にしていきたいと思ひます。そしていつか、世界中のすべての人が安全で清潔な水を使えるようになることを願ひながら、ぼくも自分にできることを少しずつ続けていきます。

佳作

水との関わり

大山崎町立大山崎中学校 三年

鈴木 愛来

人間は、食べ物が無くても、水を飲み、睡眠をしつかりとつていれば2、3週間は生きることができそうです。反対に、水無しでは、4日から5日しか生きることができないと聞いたことがあります。その理由を調べてみると、水分が不足することと血液が濃くなり、体温調整ができなくなってしまうたり、有害なものが体にたまり、脳や心臓にダメージを与えてしまったりするからだそうです。調べて、こまめに水分を取るようにして、水分不足に注意しようと思いました。飲み水は私たちが生きていくために、最も欠かせないものの内の一つだと言えるでしょう。また、飲料水だけでなく、私たちが今の生活を続けようと思うと、大量の水が必要になります。そこで私は、私たちが日常の中で使用している、水道から出てくるあの水が、どのようにして私たちの元に届き、私たちが使用した後は、どこへ行くのか、水の行き先を調べてみました。

海の水は蒸発して雲になります。その雲はとても湿っているため、森林や山で雨を降らします。この雨水たちが、ダム、湖、川などにとられ、導水管といわれる水路を通って浄水場へたどり着きます。ここでは不純物を取り除いたり、薬を混ぜたりするそうです。つまり、浄水場で水は、きれいになるといことです。雨水や川の水が、水道から出てくる水のようにきれいなると考えると、浄水場にある装置や技術はすごいと思います。浄水場で清潔にされた水は、配水池という、一時的に水を貯めておく施設に、貯められます。配水池は他に、水道管を通して各家庭に水を届けるという役割もしています。水を家に届ける際、高さを使い、水に圧力をかけるため山の上に造られるそうです。こうして調べてみると、私たちが生活の中で日常的

に使用している、清潔で安全な水には、すごくたくさんの手間がかかっていることを知りました。

次に、私たちが使用した後の水は、どこへ行くのか調べてみました。使用された後の水は、下水管を通り、下水処理場に運ばれるそうです。ここでも、前の浄水場と同じように水をきれいにします。きれいになった水は、川や湖や海に流れ帰っていくそうです。自分たちで使用した水を、しつかりきれいな状態へ戻してから、自然に帰すことは、海や川に生息している生物にも害がないので、良いことだと思います。

今回、水道水が私たちの元へどのようにして届くのか、使用した後はどこへ行くのかを調べてみて、思ったことが二つあります。

一つ目が、普段、お風呂、料理、洗濯、洗い物などの、様々な場面で何気なく使用している水が、こんなにも手間のかかったものだという事です。知った今、今まで以上に大切に、そして清潔になった水を使用できることに感謝して使わなければいけないと思いました。

二つ目が、浄水場、下水処理場、浄化センターなどの水に関する施設はすごいことです。普段、私自身が直接関わることは、ごく少ないですが、生活の中で欠かせない水をきれいにしてくれている、本当に大切な場所だと分かりました。これからも、生きていく上、生活していく上で欠かすことのできない、「水」との関わり方について、考えながら生きていこうと思います。

佳作

感謝の水

大山崎町立大山崎中学校 三年

松本 瑚白

人間の約半分以上が水で構成されていることをご存知だろうか。この事実だけで私たちの生活に水が欠かせないことは明白だ。けれども、水が欠かせないのは私達人間だけではない。他の動物類や魚類、植物達も水の欠かせない生活を送っている。私がそれを感じたのはつい最近のことだった。

ある日、私の父が花を持って帰ってきた。結婚記念日だから、父が花を買って来たのだとか。その時私は、相変わらず仲が良さそうに良かったと思いつつ、父が花瓶に花を入れるところを見ていた。

数日後の朝、父が花瓶の水を替えているところを見た。私は軽く、「へえ、花瓶の水って替えるんや。」

と言った。それまで私は花瓶の水は替えないものだと思っていたので少し驚いた。父は私の言葉にきょとんとした顔で言った。「え、毎日水替えてんで。」

当たり前のように言う父に私は目を見開いた。毎日水を替える理由が分からなかった私は父に尋ねた。すると、再び先程と同じような顔をした父が言った。

「毎日替えな水汚いやろ。」

当たり前といえど当たり前前なのか。確かに私も一日放置していた水を次の日も飲むことはない。けれどそれはあくまで人間の話で植物もそうだとはいえなかった。

なぜだか納得のできなかった私は、インターネットで、花瓶の水を毎日替えるのか検索してみた。結果は、花瓶の水は毎日替えた方が良くのことだった。そこには花も生き物だから、と書かれていた。そこでスッと腑に落ちたような感覚になっ

た。私が納得できなかったのは、植物を生き物だと捉えていなかったからだ。もちろん頭では理解していた。けれども植物は水が欲しいとは言わないし、自ら水を求めて動くこともない。そのため、私は植物を生き物だと頭では理解していたけれども心の中では理解していなかった。確かに植物は喋らない。けれど、水を与えられなかったら植物は枯れてしまう。それは、人間で言う『水が欲しい』という意味ではないのかと私は思った。植物も生き物だから新鮮な水の方が美味しく感じる。そのため、長生きする。水の新鮮さだけで、植物の未来が変わる。水はすごいのだと改めて思った出来事だった。

新鮮と言えば、学校の先生が日本の水はきれいだと言っていた。水道の水が直接飲むことができるのは珍しいのだとか。確かテレビの広告では外国にはきれいな水を飲めない子供達がいると言っていた。その時、私より小さい子達なのに大変だなと、完全に他人事のように考えていた私だが、この作文を書いて、考えが変わった。

生き物と言っても、やはり植物は感情がない。けれどその子達には感情がある。辛いだとか苦しいだとか、たくさん感じるはずだ。だからと言って、ただの中学生である私にはどうすることもできない。なので、私はこう考えた。きれいな水を飲める使えろということに感謝して大切にすることが大事だと。毎日毎日考えなくとも、たまには思い出してこの環境に感謝していきたい。そして私がこれから育てる生き物たちにも新鮮な水を与えたい。

取り敢えず、今日飲んだ美味しい水に感謝しよう。それが今の私にできることだ。